

SCIX スポーツ・ インテリジェンス 講座

第1回 2016年 6月18日
第2回 7月16日
第3回 8月27日

特定非営利活動法人
スポーツ・コミュニティ・アンド・インテリジェンス機構



スポーツ振興くじ助成事業

平成 28 年度『SCIXスポーツ・インテリジェンス講座』実施概要

■テーマ：『スポーツの多様な見方、考え方

—— クロス・スポーツ・インテリジェンス』

■趣 旨： スポーツ界の知見豊かな方々を講師に招き、スポーツの在り方や人材育成のポイントを学ぶ『SCIXスポーツ・インテリジェンス講座』の第10弾です。今年も全体のテーマは「クロス・スポーツ・インテリジェンス」。スポーツを「書く」と「撮る」。日本代表の「強化」と、高校で育てたい「人材」など、同じ競技・スポーツでも、見方・立場を変えれば、そこにさまざまな考え方や目指したい姿が見えてくる。それらに対話形式で語っていただきながら、スポーツ・教育・ビジネスの現場で人材育成に関わる皆さんにとって「多様な見方」「新たな考え方」の発見につながればと考えられています。

■日 時：2016年6月18日、7月16日、8月27日

■会 場：神戸国際会館セミナーハウス

〒651-0087 兵庫県神戸市中央区御幸通 8 丁目 1 番 6 号

■主 催：特定非営利活動法人スポーツ・コミュニティ・アンド・インテリジェンス機構(略称:SCIX)

■後 援：神戸市／神戸市教育委員会／兵庫県ラグビー協会／神戸新聞社

■対 象：スポーツ指導者、教育関係者、スポーツに取り組む子供たちを持つ父兄ほか

■受講料：無 料

■各回テーマと講師：

第1回 6月18日(土)19:00～20:30

パラリンピックを“書く視点”と“撮る視点”

出演：玉木正之 氏 (スポーツ評論家)

×

越智貴雄 氏 (写真家)



第2回 7月16日(土)19:00～20:30

女子スポーツ“人気”を“文化”にどう育てるかー。

出演：田邊友恵 氏 (日ノ本学園高校サッカー一部監督)

×

岸田則子 氏 (日本ラグビー協会女子委員会前委員長)



第3回 8月27日(土)19:00～20:30

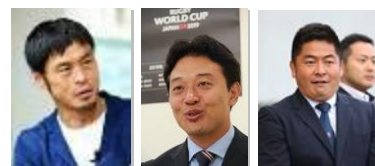
日本代表へのこだわり。“求めたい人材”と“育てたい人材”ー。

出演：岩淵健輔 氏 (日本ラグビー協会理事)

×

湯浅大智 氏 (東海大仰星高校ラグビー一部監督)

司 会：平 尾 剛 氏 (神戸親和女子大学准教授)



第1回 パラリンピックを“書く視点”と“撮る視点”

講師：玉木正之 氏 × 越智貴雄 氏

日時：2016年6月18日(土)19:00～20:30

会場：神戸国際会館セミナーハウス



今年で10回目を迎える『SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』。今年も「クロス・スポーツ・インテリジェンス」と題し、「書く視点」と「撮る視点」、女子スポーツの「人気」と「文化」、「求めたい人材」と「育てたい人材」といったテーマを設定し、異なる競技種目の指導者や、対極に位置するジャンルの方々を講師にお招きし、対談形式で三回にわたって繰り広げていきます。

第一弾は、スポーツ評論家やコメンテーターとして様々なメディアでご活躍の玉木正之氏と、写真家の越智貴雄氏によるクロストーク。越智氏は、「2020 東京オリンピック・パラリンピック招致をもたらした一枚」とも言われる、最終プレゼンテーションの佐藤真海さんのスピーチに映し出された跳躍写真を撮影したカメラマンとして一躍話題に。プライベートでも親交があるというお二人をお招きして「パラリンピックを“書く視点”と“撮る視点”」をテーマにお話いただきました。

プロジェクターに映し出される越智氏の作品を見ながらトークは展開。一枚目は、視覚障がい者と伴走者の紐で繋がれた指がスタートラインに並ぶ様子を撮影した写真。玉木氏からその写真の意味や、パラリンピックの起源や語源が説明され、間近に迫るオリンピック・パラリンピック開催地であるリオデジャネイロの姉妹都市は？ というクイズからスタートしました。参加者の一人が「神戸」と正答をし、会場からは拍手が。そういった参加者との絡みもありつつ、「パラリンピックに出会ったのは？」という玉木氏から越智氏への質問から対談へと移行していきました。



大阪芸術大学で写真学科を専攻していた越智氏。新聞社で記者経験のある大学の恩師がゼミでオリンピックの話をも熱く語っていたそうで、その影響で元々はオリンピックの撮影をしたくて2000年のシドニーオリンピックに行ったのだとか。無事にオリンピックの撮影を終えた後、新聞社からパラリンピック撮影のオファーがあり、そこでパラリンピックを目の当たりにし、衝撃を覚えたのが障がい者スポーツに興味を持ち始めたきっかけだそうです。

はじめは、腫れ物に触る思いで、障がいの事に触れていいものか、何か手伝ってあげないといけないのではないだろうか？ という思いを抱きながら取材に挑んだのだそうです。それが開会式で入場する選手たちの笑顔を見て、意識が変わり、実際に競技する選手たちの姿に、オリンピックの選手や競技を見るのと同じように興奮しながら見ている自分に気づいたと当時の思いを語りました。

それを受けて、玉木氏も「障がい者スポーツは百聞に一見にしかず」と同調。「知ってる、知らない、見る、見ないでは大違い。パラリンピックを見ないなんて勿体ない！」と玉木氏。「人間てこんなことができるんや、って思わせてくれるのがパラリンピック」と越智氏。パラリンピックの素晴らしさを知るお二人から熱いコメントが飛び交いました。

その後、玉木氏から越智氏の作品について紹介があり、2012年、パラリンピックの義足アスリートの資金集めのために出版されたカレンダーと、2014年出版の義足の女性たちを撮影した「切断ヴィーナス」が会場で回覧され、参加者たちは作品を見ながら引き続きお二人のトークに耳を傾けました。



次なる話題は道具の進化について。障がい者がスポーツをすること、さらには障がい者スポーツ発展には義足をはじめ、器具や道具の進化の影響が非常に大きいようです。TOYOTA のルマン 24 のチームが開発に携わったシッティングスキーなど、大手企業が莫大な費用をかけて障がい者スポーツの道具や器具を開発しているのだとか。とはいえ、自身の肉体強化を図らないと、トップレベルの器具や道具は使いこなせないのだそうです。

昨今、ロシアのドーピング問題が取り沙汰されていますが、競技で使用する器具の進化はもとより、トレーニング器具の進化を踏まえると、テクニカルドーピングの問題も今後は考えていかななくてはならないのではないかと問題提起もありました。そんな中、越智氏よりスイスのサイバスロン大会という耳慣れない言葉が飛び出し、サイバスロン大会の CM 動画が流されました。例えば首から下が麻痺で動かない人でもロボットスーツを着用すれば競技ができるといったもので、リオパラリンピック閉幕後、10月20日からスイスで開催されることが決定しているのだそうです。



この映像に驚きを隠せない様子の玉木氏。「突き詰めると、人間とは何か？」というところに行き着くと同時に倫理的問題にも関わってくるだろうと玉木氏は言います。

今や企業の考え方も変わり、オリンピックよりもパラリンピックを支援する企業が増えており、さらには、オリンピック同様にパラリンピアンを CM に起用する企業が増えているそうです。当初、パラリンピックはオリンピックのおまけのようなもので、「障がい者も頑張っているよ」という認識が強かったパラリンピックや障がい者スポーツをしている人たち。それが、CM はじめメディアでの露出のされ方や、実際の競技の迫力によって、今ではオリンピックやオリンピックよりも注目度が高くなっている、「かっこいい」という認識に変わってきていると時代の変化を痛感しているとお二人。



間もなく開催するリオ五輪でも日本選手の活躍が期待されるパラリンピック。はたまた 2020 年には東京での開催が決定しています。多くの人たちにとってパラリンピックは、まだ障がい者スポーツの延長のように映っている感否めません。健常者に比べてハンディキャップがあるとはいえ本物のアスリートたちが挑む世界最高峰のスポーツ・イベント。その姿をどのように伝えたいのか。また観る側は、この競技、この大会をどう受け止め、オリンピック同様、この国のスポーツ文化として根付かせていったらいいのか。今回の対談でパラリンピックを考えるヒントを掴んでもらえたのではないかと思います。まずは「百聞は一見にしかず」。パラリンピックを観戦しましょう！

次回、第 2 弾は 7 月 16 日(土)。高校女子サッカーインターハイ 5 連覇を目指す日ノ本学園高校サッカー部監督・田邊友恵氏と、日本ラグビー協会女子委員会前委員長・岸田則子氏をお迎えし、『女子スポーツ、“人気”を“文化”にどう育てるか』をテーマにお届けします。皆様のご参加をお待ちしております。

第2回 女子スポーツ“人気”を“文化”にどう育てるかー。

講師：田邊友恵 氏 × 岸田則子 氏

日時：2016年7月16日(土)19:00~20:30

会場：神戸国際会館セミナーハウス



2016年度2回目の「SCIX スポーツ・インテリジェンス講座」は、高校女子サッカー界より、全日本高校選手権2連覇ならびに、間もなく開催される高校総体で5連覇を目指す、女王・日ノ本学園高校サッカー部率いる田邊友恵監督と、日本女子ラグビー界の第一人者といえる日本ラグビー協会女子委員会前委員長の岸田則子さんを講師にお迎えし、「女子スポーツ“人気”を“文化”にどう育てるかー。」をテーマにお話いただきました。

日本におけるサッカー人気の歴史は、人気マンガ「キャプテン翼」や、1991年のJリーグ発足により今や3万人を超える競技人口となり、サッカーという競技の位置づけがガラリと変わったことは言うまでもないでしょう。女子サッカーという点でいくと、2011年開催のドイツワールド杯でのなでしこジャパン優勝が大きなきっかけとなり、女子の間でもサッカーが人気となり競技人口も拡大してきています。

一方、ラグビーに目を移すと、一大ブームということであれば、昨年のラグビーワールド杯での日本代表の活躍、大躍進は記憶に新しいかと思えます。五郎丸選手のルーティンが注目され、流行語大賞になり、テレビでも見ない日がないほどラグビー選手やラグビーそのものが脚光を浴びました。また女子ラグビーにおいては、2016リオデジャネイロオリンピックから正式種目となった7人制ラグビー代表のサクラセブンズも注目されています。

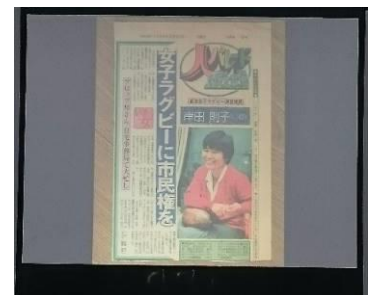
そんな背景をふまえ、今回の対談を企画。女子サッカー界と女子ラグビー界、それぞれに属するお二人に、日本における両女子スポーツの歴史や現状から、人気を文化に育てるにはどうすればいいのか？第2回目の今回はSCIX理事を務める美齊津が進行を担当し、田邊氏、岸田氏に語っていただきました。



冒頭は岸田氏の選手時代の写真や新聞記事などをプロジェクターで映し出し、その映像とともに岸田氏の経歴を紹介。先頃、これまでのラグビー界発展の功績や、サクラセブンズのリオ五輪出場が評価されJOCスポーツ賞の「女性スポーツ賞」受賞についても触れられました。土のグラウンドでラグビーをしている場面が撮影された、時代を感じる映像に、受講している女子ラグビー

関係者からは時折笑いやどよめきが起こりました。

続いて、SCIXのイベントではレギュラーゲストとなりつつある田邊氏のプロフィールを紹介。サッカーとラグビーは共通点もあり互いにいい効果が見込めるのでは？ということで、SCIXラグビークラブとの交流実現という美齊津理事からの提案に田邊氏が「ぜひ！」と快諾される場面もみられました。



その後、話題は昨年カナダ大会で惜しくも W 杯連覇を逃し、今年 3 月のアジア最終予選でもリオ五輪出場の切符を獲得できなかったなでしこジャパンへと移行していきました。この、なでしこジャパンの敗戦が、自分の教え子たちが今後もサッカーを続けて行く中で、教え子たちの歩む道の上で少しずつ影響が出て来そうだと、過去の女子サッカーの歴史を例に出しながら田邊氏がコメントしました。「ワールド杯優勝以前のなでしこの中心メンバーは、今回同様かつてオリンピックの切符を逃し、それが引き金となり企業撤退が相次いだ Jリーグ（現なでしこリーグ）衰退当時の選手たちであり、女子サッカーの灯火を消してはいけないと奮起した結果がワールド杯優勝である」と。さらに「繰り返してはならない歴史を今繰り返すことになりかねない」と、女子サッカー界への懸念を吐露しました。

一方、女子には危険だとみなされ、なかなか協会でも受け入れられなかった女子ラグビー。協会に認められない中 1991 年カナダワールド杯に 15 人制女子ラグビー代表兼団長として強行参加し、草の根的活動で女子ラグビー普及に務め、女子委員会設立に多大なる貢献をされた岸田氏。「競技普及のために底辺を拡大すべく 7 人制ラグビーへの公募活動を 2003 年からはじめ、当時ラグビーを始めた女の子たちがレディーになりサクラセブンズとして今現在活躍し、リオ五輪に出場するという結果を出したことについては素晴らしいと思うと同時に、非常に嬉しい」と、サクラセブンズの活躍を賞賛しました。

とはいえ、企業スポーツとして非常に恵まれた環境でなされる男子ラグビー界に比べると、今なお女子ラグビーの環境は厳しいと告白。また、7 人制ラグビーは 15 人制と比較すると人数的ハードルが下がるので取り組み易くはあるが、競技人口の拡大にはならないと岸田氏。俊足でスタミナがある選手に特化される 7 人制、それに引き換えポジションごとに体格や特性が活かせる 15 人制の方が競技人口拡大には繋がると岸田氏は持論を展開。「難しい問題」と本音を漏らしました。

サッカーを始めた当初は男子チームで男の子と一緒にサッカーをしていたという田邊氏。岸田氏に、「ラグビーは女の子と男の子は一緒にできるのですか？」などと、お二人が直接質問ややりとりをするシーンも見られ、その中で、「男女が共に競技をすることで女子の競技レベルアップに繋がる部分もある」と、指導現場での実感を田邊氏がコメント。

さらに、田邊氏の指導者としての持論として、「理想論かもしれないが、何より指導者の情熱が大切。情熱のあるところに人は育つ。指導者にはロジックとパッションが必要」といった名言も飛び出し、受講者が一斉にメモをとるシーンもありました。

加えて「卒業してからもどんな形でもいいので、お母さんになって我が子に教えるとかでもいいので、サッカーやスポーツを教える女の子が増えることを願っているし、そのためには自分自身がよりよい指導者になることが大切だと思う。男性社会ともいえるスポーツ界、指導者の世界で女性指導者が増えることを願っている」と教え子とスポーツ界への想いを語りました。

また、岸田氏からは、メディアに対して厳しい意見も。「日本のスポーツが人気から文化に昇華できない要因の一つに、特に女子スポーツ界においては選手のルックスの良さが優先されるきらいがあり、そういう風潮にある限りスポーツは文化になり得ない」と問題提起がされました。



「スポーツは人生をよりよく生きるための一つの手段であり、ラグビーは歳がどれだけ違ってもラグビーを愛した『同志』になれることが大きな魅力」と岸田氏のスポーツ愛、ラグビー愛を感じる言葉も頂戴し、会の最後は、岸田氏の「同志」であるラグビー愛好者からの質問への解答で締めくくられました。

「サッカーはどのような取り組みを経て、今のような環境になったのか？」この問いに対する解答として、この日受講者として参加していた SCIX 会員でもある現・神戸サッカー協会副会長の加藤氏よりスポーツ普及に関する3つのポイントが挙げられました。

- ・ 日本代表の活躍
- ・ 育成システムの確立(トレセン・プロチームの下部組織・ロツジングなど)
- ・ 各年代別、レベル別の競技会運営(トーナメントではなくリーグ戦を実施)

上記のような環境や条件を満たすことが競技普及に繋がると、加藤氏は言及。

一朝一夕にはいきませんが、それぞれの立場で、できることから取り組み、日本のスポーツの“人気”を“文化”にしていければと。SCIX もその一助を担うべく今後も活動していこうと思います。

今回も沢山の方に受講いただきありがとうございました。

今年度最後の『SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』は、来月 8 月 27 日(土)開催です。

今回は、日本ラグビー協会理事・岩淵健輔氏と、東海大仰星高校ラグビー部監督・湯浅大智氏を講師にお招きし、元 SCIX メンバーであり、現・神戸親和女子大学准教授の平尾剛氏司会でお送りします。皆様のご参加お待ちしております。



第3回 日本代表へのこだわり。“求めたい人材”と“育てたい人材”。

講師：岩淵健輔 氏 × 湯浅大智 氏

司会：平尾 剛 氏

日時：2016年8月27日(土)19:00~20:30

会場：神戸国際会館セミナーハウス



今年最後の「SCIX スポーツ・インテリジェンス講座」は、日本ラグビーフットボール協会理事の岩淵健輔氏と、2016年全国高校ラグビー大会をはじめ、春の選抜、夏の7人制と三冠を果たした東海大仰星高校ラグビー部監督の湯浅大智監督をお招きし、「日本代表へのこだわり。“求めたい人材”と“育てたい人材”」をテーマにお話しいただきました。

また、今回は元SCIXメンバーでもあり、神戸製鋼ラグビー部ならびにラグビー日本代表経験もある神戸親和女子大学准教授・平尾剛氏がファシリテーターを務め、講師お二人から興味深いお話をうかがうことができました。

講座の冒頭は、記憶に新しいリオ・オリンピックでの男子7人制ラグビー日本代表の活躍について。

ファシリテーターの平尾氏も評していましたが、オリンピック観戦に勤む日本国民のほとんどが、初戦・対ニュージーランド戦の大金星はじめ、今回のセブンスの活躍には大興奮し、ベスト4という結果は期待以上のものだったように思います。ところが、リオ・オリンピックにもスタッフとして帯

同した岩淵氏は、今回の結果に対して「目標に達することができなかった。メダルを獲らないと(ラグビーファンではない)一般の人には見てもらえない」と。

これには日本代表経験のある平尾氏でさえも驚きと同時に、「日本ラグビー界の未来が頼もしい」とコメント。また、未来の日本代表を育成する立場にある湯浅氏は「小柄な自分たちでも世界相手に戦えるんだ。あのステージに自分たちも立ちたい！」と、代表の活躍が学生たちに希望を与えたと述べました。

さらに、高校生年代でも7人制ラグビーが導入され始めたことを受けて、代表とのスピード感の違いを実感したと湯浅氏。スピードもさることながら、前-6、後-1というディフェンス・システムがスタンダードな中、前-7というリスクキーなディフェンス・システムに衝撃を覚えたと同時に、リスクを抱えながらも信じてやり続けることの大切さを痛感し、その姿に学生たちも感銘を受けていたと続けました。

さらに岩淵氏からはオリンピックでの裏話も。オリンピックでは各競技でスタッフに出されるパス(許可証)の数が違うらしく、メダル獲得が有望視される競技ほどパスが多く、スタッフの数も多いのだとか。今回ラグビーは男女チームで4人ずつしかスタッフが帯同できなかったそうで、協会理事である岩淵氏自ら通訳や広報といった業務から、ウォーターボーイに至るまで数々のサポートをしていたと東奔西走の様子もうかがえ、笑いも交えた和やかな雰囲気でのトークは展開していきました。



続いて話題は昨年の W 杯に。日本中が歓喜に沸いた南アフリカ戦。「勝つと思いませんか？」と平尾氏の問いに、「勝つと思っていた」と岩渕氏。勝因として、南ア戦に向けて約8ヶ月かけて準備をしてきたこと、W 杯直前のイギリス遠征で意図的に練習量を落とすことをあげました。20 年前のニュージーランド戦での大敗からここに至るにあたり、監督をはじめスタッフ全員、選手自身が「本当に勝てる」と思える“マインドセット”が何より大切だと感じた振り返りました。逆にスコットランド戦の敗因については、南ア戦ほどの準備をしてこなかったこと、さらにメンタル的な切り替えができていなかったと吐露。その点、リオでのセブンスの選手たちはゲーム毎の切り替えに慣れていることもあり、ベスト 4 という結果が残せたのではないかと分析。

一方、1 日置きに試合が行われる高校生年代では試合に対するモチベーションアップの仕方が大切と、自らモチベーションアップ動画を作成し、試合前に見せると湯浅氏。流行の音楽を学生にヒアリングすることもあるのだとか。その話を受け、日本代表もモチベーションビデオは作成するとのことで、実際の映像も流され、当時の代表監督・エディージョーンズ氏の人柄や指導、試合中の秘話など岩渕氏ならではのトークも聞くことができました。



その後、話題はラグビー界の今後に移行。どういう人材を育成するのか？ 欲しているのか？ という今回のテーマに関する点において、岩渕氏は「いい選手は、U-○○など、出来る限り高いレベルに身を置いてもらいたい。色々な局面でいい判断ができること、考える力が必要」と。

湯浅氏もこれに同調し、高いレベルの選手と共に過ごすことで、プレーだけでなく空気感や普段の言動、立ち居振る舞いから様々なことを学ぶことができるとコメント。

また、実際、学生を指導する上では、一人一人に何らかの役割を与えるようにしているのだとか。全員に役割を与え、小さな成功体験をさせることで、それがグラウンドでも生きてくるというお話がありました。さらに、湯浅氏からは 2019 年自国開催の W 杯、またその先に向けての「ジャパン・スタンダード」といえるラグビーの指針の提示が欲しいと岩渕氏へリクエスト。国としてベースとなる育成方針があることは、育成年代での指導者にとっては重要。これを機に、トップと現場の連携がさらにうまく繋がることに期待したいと思います。

最後に、岩渕氏からは 2019 年 W 杯、2020 年東京五輪での日本代表の目標として、ベスト 4、メダル獲得と



頼もしいコメントが聞けましたが、その先を見据えた日本におけるラグビーのあるべき姿について、講師お二人が口を揃えておっしゃった言葉がとても印象的でした。「子ども達が公園でラグビーをして遊ぶ、公園にラグビーボールが転がっている、そんな光景が見られるようにしたい」。トップと現場が同じ未来を見ている、日本のラグビーの未来は明るいと感ぜさせてくれる言葉で締めくくられました。

今年度は今回で最後となるインテリジェンス講座。今回もたくさんの方にご参加いただきありがとうございました。来年度も皆様にとって何かしらのヒントとなる会を企画していく予定ですので、引き続きよろしく願い致します。

田邊友恵氏顔写真／金子悟 岸田則子氏顔写真資料撮影／池田まさあき

湯浅大智氏顔写真／ラグビーマガジン編集部

レポート／中野里美